

## セクシュアル・ハラスメント防止のための学生向け講演会

開催：2007年9月26日（会場：J301教室）

主催：和光大学ハラスメント委員会

講師：丹羽雅代（和光大学ハラスメント外部委員）

井上：今から講演会「セクシュアルハラスメント―被害者にも加害者にもならないために」を開始します。皆さん、セクシュアルハラスメントという言葉は聞いたことがあると思うんですが、セクシュアルハラスメントとは具体的にはどういうことを指すのか、ということが問題なのかということは、あまり知らない人も多いかなって思うんですね。また、自分とは関係ないと思ってる人も多いと思うんですが、実はそうでもない。大学の中でも、アルバイト先でもさまざまなところで起こる問題です。そういうことに対して和光大学にはハラスメント委員会というのがありまして、去年からできてるんですけども、皆さんが相談に来た場合には何らかの救済をとるような、そういう委員会を作っています。今日司会をさせていただくのは、私、井上ですが、ハラスメント委員会の副委員長をしています。今日は、ハラスメント委員会から皆さんにぜひ、セクシュアルハラスメントとは何か、こういう問題に自分が被害者になることがあり得る、また学生さんでも加害者になることがあり得るので、そうならないためにはどうしたらいいか、ということで丹羽雅代先生に講演をしていただくという企画をしました。それではまず、ハラスメント委員会委員長の伊東先生からご挨拶をしていただきます。

伊東：経済学科の伊東です、よろしくお願いいたします。今日は、丹羽先生にハラスメントについてのお話を伺うことになりました。この問題は、生活のなかであちこちに、まさにころがっているというような問題だと思います。そしてそのような中でお互いに不愉快な生活を送らないためにどうしたらよいのかということについてのヒントを話していただき、少しでも皆さんが生活の中で役立てていただければと思います。最後までしっかり聞いて、お互いに楽しい学生生活を送れるように努めて下さい。どうぞよろしくお願いいたします。

井上：それではさっそく丹羽先生のご紹介をしたいと思います。丹羽雅代（にわまさよ）さんは日本で「セクシュアルハラスメント」という言葉を広めたというか、その最初のグループのメンバーの方です。1980年代の終わりごろに、「働くことと性差別を考える三多摩の会」というグループを作ってらして、その会がアメリカで出されていた「セクシュアルハラスメントについてのガイドライン」の翻訳をして、日本でもこういう問題についてしっかり考えようということで、セクシュアルハラスメントとはこういう問題だということを語り始めた、そういう中のお一人です。その後、丹羽さんは東京ウィメンズプラザで相談員をされたり、またセクシュアルハラスメントに関わっては東京大

学を始めとしてたくさんの大学で相談員とか相談員のアドバイザーとして活躍をされてこられた、セクシュアルハラスメント問題についての専門家と申し上げていいと思います。和光大学には、昨年度から、先ほども言いましたハラスメント委員会の外部委員として、また、相談員のアドバイザーとして、いろいろ相談にのっていただいています。今日はそういうセクシュアルハラスメント問題について詳しい丹羽さんから皆さんにお話をさせていただきたいと思います。是非きちんと聞いて、問題点を掴んでください。それでは丹羽さん、よろしくお願いします。

丹羽：みなさんこんにちは！（拍手）今、ご紹介いただきました丹羽雅代と申します。拍手をありがとう。今日はみなさんといろいろお話しながら一緒に考えてもらいたいと思っているのでよろしくご協力ください。

お話しするのはセクシュアルハラスメントということですが、セクハラって言葉知ってる人は？ はい。知らない人は、いないですね。でも、このセクハラって言葉は、もともとあった言葉かという、実はこれ、1960年代にアメリカで、作った言葉、造語なのです。考えてみてください。セクシュアルっていう言葉と、ハラスメントっていう言葉って結構ミスマッチなわけですよ、セクシュアルっていったら、どきどきするとか、なんとなくもわっとするいい感じかなって思うような言葉。でもそれに対してハラスメントっていうのは、強迫とか、脅かし、命の危険を感じるような、そんな状態を示す言葉なんです。そうするとちょっと変ですよ。似たようなミスマッチの言葉として言うならば、最近使われるようになって来た、デイトレイプって言葉があるんですが、知ってますか？デイトレイプって聞いたこと、ある？デイトとレイプってどうして両立するのって思うんですけど、そのデイトレイプっていう言葉もまた造語としてあるんですね。こんな状況をなぜ問題にするようになったかっていうと、60年代にアメリカで女のひとたちが、自分たちをちゃんと一人前に扱え、人間として、生活し、働き、安全を確保できる、そんな状況をちゃんと作って欲しい、今の状況じゃだめなんだ、ということを示す言葉として、セクシュアルハラスメントという言葉を作ったんです。その言葉を紹介して皆で一緒に考えて、そして日本の状況を考えるいいきっかけになる言葉だというのが、私たちが取り組み始めた最初だったんです。

セクシュアルハラスメントの問題をひと言で言えば、性差別の問題なわけですよ。性差別って言ったら、今の日本で性差別あると思いますか？どうですか？性差別を感じることはありませんか？

学生男子：まああるかな。

丹羽：どんなとき？

学生：やっぱ、なんか、扱いが違うっていうか、女と男と。

丹羽：男と女と扱いが違うって感じる場面がある？具体的になんか、思いつきます？

学生：いろいろあると思うんですけど…。

丹羽：どっちかっていうと、男のほうが損だなとか思ったり？

学生：まあ、確かに、ある。

丹羽：なるほど、そういう感じがするのね。女の人の方をなんとなく優遇してて、男は損だなんて感じていて、それは性差別であるって思ったり、する？

学生（女子）：男の人だから、力仕事は男がやるみたいな。で、女の子は料理の手伝いとかしなさい、とかそういう扱いをやっぱ、サークルとかで集まってイベントやったりとかそういうときにあります。

丹羽：あ、なるほど。サークルでいろんなイベントやるときに、男の子は、ほら力仕事だから男集まれー、って言われて、女の子の方にはじゃ、裏方ね、お台所とかごはんを作る用意とかしてね、とか言われたりしてそういうのって、なんか扱いが違うよなあって思ったりする？性差別を感じたり、そういうのってありますか？

学生（女子）：女性専用車両。

丹羽：あ、なるほど。女性専用車両、あれって性差別じゃないのって気がする？どう思う？あなたは女性専用車両って…

学生（女子）：いいと思います。

丹羽：いい意味での性差別、なのだという気がするということ？、うん。

どう？女性専用車両があったら乗ったほうがいいって思う？

学生（女子）：…痴漢とかされたりしたことがあったら、怖いから乗るしかないと思うから、あったほうがいい。

丹羽：たとえばセクハラされたり痴漢の被害を受けたりしたことがあると、女の人しかいない車両のほうがいい、って思ったりするっていうけどどう思う？

学生（男子）：え？そうすね。（笑）

丹羽：それから？

学生男子：そうです、やっぱ、いいと思うっす。

丹羽：そう？でも男の方がぎゅうぎゅう詰められて、いやだねえとか。セクハラとかあるのと思ったりしない？やったことある？

学生：やったことはないすよ！（笑）

丹羽：やられたことは？

学生：ちょっとやられたかなって思う時もあるけど。

丹羽：あなたが被害を受けたと感ずることもある？そう、どんな？

学生：あの、なんか、おばちゃんとかがじろじろ見てきたり（笑）、怖いなあと思って。

丹羽：今もマイク突きつけられて怖いなど。

学生：そ、ちょっと怖い。（笑）

丹羽：あはは。ふーん、ホント？それってセクハラだと思う？

学生：ぎりぎりじゃないすか？

丹羽：ふーん、どうしてそれがセクハラに繋がる気がするの？ちょっと考えて。

学生：…あとで考えます。

丹羽：（笑）。ありがとうございます。今、現象的に性差別とかセクシュアルハラスメント

とかがあるのかないのか、どうなのかなって、結構女の子もラッキーな状況にあるんじゃないの、なんて思ったりとかね、何が性差別で、何がセクシュアルハラスメントなんだかわかんないよって、思っている人もたくさんいるかもしれません。はたしてセクシュアルハラスメント、性差別がいまの社会でも解消されているといえるのかどうかっていうことをちょっと考えてほしいと思っているんですね。

セクシュアルハラスメントと言葉を紹介したのは、実は今から約20年ほど前のことなんです。皆さんが生まれるか生まれないかの頃。セクシュアルハラスメントって、流行語大賞になったんですよ。その流行語大賞をもらった人の話をちょっとしたいと思います。もらった人は、千葉県の船橋でダンサーの仕事をしている女の子の人でした。その女の子が、仕事が終わって駅へ帰ってきたんですね、そしたら酔っ払いがしつこくしつこくからんで来るんです。彼女はとっても背が高くって、ちょっと目を引く雰囲気でした。酔っ払いさんはその人に近づいてきて、いろんなことを言ってくるんですね。ちょっと卑猥な言葉なんかをかけたりしながら、いろんなことを言ってくる。彼女はそれを無視して歩いていただけでも、ずっとついてくる。ホームまでついてきちゃった！ホームまでついてきて、まだしつこくしつこくそういうことを言ってくるのを止めない。もう半分怒鳴り声のような状態。それで彼女は思い余って、回りの人に、ちょっとこの酔っ払いさん、何とかしてくださいって言ったんですよ。どうしましょう？

学生（男子）：助ける（笑）。やめろよって言う。

丹羽：やめろよって言う？電車なんかでそれに近いシチュエーションにあったことある？

学生：ない。

丹羽：目の前で酔っ払いが何か騒いでる、なんていう場面。

学生：あー、ある。

丹羽：そのときに、おい、やめろよって、言う？

学生：言えないっす。

丹羽：言えない（笑）。なんで？

学生：怖い。

丹羽：言えない、怖い。怖いんだよね。怖いと思うよね。

学生：（笑）

丹羽：そうかね。そう？あなたは？

学生（男子）：止めろって言います。

丹羽：絶対ね？

学生：絶対。

丹羽：よし！止めろって言ってくれる人がたくさん出てくるといいよね。だけれども彼女の前には実際にはそういう人は出てこなかったんです。出てこなかったからどうしたかっていうと、彼女は荷物を置いて、近寄ってくる酔っ払いを、止めてくださいって、どんと押したのね。そしたらその酔っ払いさんは、重いかばんを提げていたものだから、ふらふらふらっと線路へ落っこちちゃったんです。線路に落っこちちゃって初めて、回

りの人はびっくりした。で、何とか助けなきゃっていうんで、逃げろとかいろんなこと言うんだけど、その酔っ払いさんはきょとんとしてて、状況がつかめない。そこに電車が入ってきて、その酔っ払いのおじさんは、電車に轢かれて亡くなってしまいました。で、これってどうなると思います？

実はこの女の人、傷害致死っていう罪名で起訴されたんです。裁判になって初めてそれが新聞に載って、女の人たちがびっくりしたのね。この人がなんで傷害致死罪で、裁判にかけられなきゃいけないのか。同じような状況を想像できるかなあ、みんな。そういう状況って、想像つく？わかんないよねえ。目の前にそういう状況が起きたとき、どうしていいかわからない。どうしていいかわからないまんまに事態が進行するっていうことが、現実にはたくさんあるんですね。この事件の結末をとりあえず言っておくと、女性たちが非常に大きな関心を持ちました。その女性はもしかしたら私だったかもしれない、ってみんな思った、たくさんの人がね。それで署名を集めて裁判を傍聴するということが続けられました。最終的にこの事件は、女性は、正当防衛であった、まったく犯罪として扱われるべきではない、結果的に一人の命が失われたのは事実だけれども、問題の本質は彼女がやった行動にあるのではないと判断されました。で、この女性がセクシュアルハラスメント、流行語大賞の賞をもらった人になったわけです。

セクシュアルハラスメントっていうのはいったいどういうことか。なんで、彼女が受けた状況が、セクハラという被害だと、みんなが判断したかっていうことをちょっと考えて見てください。

彼女は、裁判の中で次のように主張しました。もし私が男だったら、その酔っ払いは自分にあんなにしつこくは言ってこなかっただろう。また自分が地味な服装をしていたら、そんなふうにはならなかったかもしれない。あるいはそんな遅い時間でなかったらこんなことにはならなかったかもしれない。だけれども、自分の服装だとか行動する時間だとか、それから背が高くて目立つことだとか、華やかな雰囲気を持っていることだとか、そういうことが何で悪いんですか？何でそれが非難されなきゃいけないの？これ、男だったらそうはならないでしょう？ていうことですよね。やっぱりその人が女だから、女というものはこうでなきゃいけない、ああでなきゃいけない、ということについての判断がその事件の扱われ方にあったということで、彼女は加害者として裁判にかけられたけれども、実は彼女は被害者であったんだということ、そういうことが認められていったってということなんです。セクシュアルハラスメント、セクハラっていうとね、なんとなく、触るとか、性的な誘いかけをするとか、そういうことに限定されると思われがちなんですよね。たかがセクハラぐらいとか、触ったって減るもんじゃなしとか、いろんなことがセクハラにまつわる言葉として言われるんですけれども、でも実際には、その具体的な一つ一つのことを考えてみると、恐怖を感じたり、不安に思ったり、自分の人生が変わっていつてしまったり、ということにつながる人が多いのです。今日は皆さんの学生生活につながるようなケースを考えてみてもらいたいなと思って、3 つほど書いてきました。ちょっと見てください。

1つ目のケース。バイト先での出来事。ペットショップで働いている学生さんです。いつもきわどい話をしたがる常連のお客さんが来るんです。先週のこと、店長が出かけていて私だけの時、そのお客さんがやってきて、新製品の試供品のことで盛り上がりおしゃべりしてたら突然、うちには今4匹ペットがいるんだけどね、どう、君、5匹目にならない？って言ってきた。ねえ、そんなこと、言われたら、どうしましょう？5匹目にならない？って言われちゃったって。どうする？

学生（女性）：不快、つか、やだ。

丹羽：やだよ。やだから、むかつくーと言って、無視する？

学生：なんかそのままたぶん対応して、そのあと警察とかに連絡しちゃうかも。

丹羽：なるほど。非常にむかつくんだけど、その場ではなんとなく対応をする。実は彼女もそうした、って言うんですね。どんなふうにしたか。「残念でした。私には飼い主がいます」って言った、っていうんですよ。どう？その答え方。

学生：この場ではあまりよくなかったんじゃないかな、って思います。

丹羽：どういう風に言ったらよかった？

学生：否定できたらよかったんじゃないかな、と思うんですけど、まあしょうがないのかなあ。お客さんなんで、しょうがないかなと。

丹羽：そうなんですね、ふざけたこと言わないでくださいって、ばしん！と殴るとか、そういうことを彼女はできなかった。しないで、「残念でした、私、飼い主がいるんですよ」って言ってしまって、そのときは「わりとうまいことやれたかな」って思ったんだそうです。でも後で考えてみるととっても不快な気持ちがわいてきた。不快な気持ちがわいて、なんで自分がそんな風にしちゃったんだろうか、なんか自分のほうにスキがあるんだろうかとか、それから、また来たらいやだなあとか、もっといろんなこと言われるんじゃないかなとか、飼い主いますって言っちゃったら、経験豊富なんだねえとか、またもっと話がひどくなっていきそうな感じも受けたりした。どうしたらいいのかって彼女が思っているわけです。もうバイトやめたほうがいいんだろうかとか、もっと違う対応ができたんだろうかとか、そういえば似たようなことが前にもあったなあとか、思ったりした。そんな風にお友達から相談されたらどうする？

学生：やっぱり、客観的に見たら、警察とかにいったほうがいいんじゃないかなあとか思うんですけど、本人だったらそこまではできないから。

丹羽：警察に、たとえば今、お客さんからこんな風なことを言われました、と警察に行ったら、警察はどうするかしら？

学生：ちゃんと動いてはくれない気がする。

丹羽：どう思います？

学生：そんなにちゃんとは動いてくれなさそうだなっていうイメージもあるから。

丹羽：この状況でたとえば警察に行ったらとすると…。誰か、法律に詳しい人はいませんか？警察はその問題を扱ってくれるだろうか？

学生：くれない。

丹羽：くれない。残念ながらねえ。警察は、ふうん、それで？とか、それで何か実際にたとえば体触られたとか、わいせつ行為を受けた、被害を受けたとか、そういうことがあったのかい？って、たぶん聞くとするんですね。いや、別に言葉だけです、って言うと、じゃ、まあ、君のほうもばしっていいんだから、とか言っておしまいになっちゃうんじゃないかな。これが軽犯罪として問われるためにはどういう条件が要るかっていうと、相当しつこくしつこく、そのお客が絡んできて、彼女が逃げようとしても逃げるができないような状況に追いやられたり、または、その不快な感情がものすごく刺激されるような対応が長時間続く、というようなことがあったときはたぶん警察は考えると思うんですけど、ここまでのシチュエーションだったら、うんでもすんでもない、というわけなんです。じゃあ、この人は何にも方法はないのか、警察が頼りにならなかったら、どうする？どうしよう？その女の子が、あなたに相談をした、どうしたらいい？

学生（男子）：（無言）。

丹羽：わかんない。方法なし？

学生：なし。

丹羽：困ったね。なんか、対応してほしいわけよね、その人は。相談に乗ってほしいの。なんか、方法ない？

学生（女子）：なんだろう、私はそんな詳しくないから、大学の先生とかそういう大学に委員会があるからそこで事例話して、連絡取れるようにとか、電話番号とか教えてあげたり、はできるかな。

丹羽：なるほどー。「私はちょっとよくわかんないけど、相談に乗ってくれる人はいるよ、大学の相談窓口に行くと話聞いてくれるんじゃないか、いい知恵出してくれるんじゃないかな」と言う、だから、電話番号これだよとか、このリーフレットを見せてあげるとか、そういうことをするってことは一つの方法だって。

学生（男子）：はい。

丹羽：確かにそうだと思います。一つの方法です。大学の相談員の方は、そのことで相談に来たら、どうするでしょう？どうしましょう？

相談員：とても困りますね。相談員は、こうするといいて解決方法を示すわけじゃないので、その人の話をよく聞きながら、どうやって解決しようって一緒に悩む存在です。

丹羽：はい、ありがとうございました。でも、一緒に、話を聞いて悩んでくれる、それだけで実はとっても元気が出るってことはあるんですよね。

話をすると、しかもそれが、あなたがちょっと不注意だから気をつけなさいっていうのではなくって、そうなんだ、そういう気持ちだったんだね、って話聞いてもらって、まずそのことだけで、あ、そっか、自分が別に間違ってたし、悪くもないし、という気持ちがわいてくるということはあるわね。相談に行けばそういうことがまずできるだろうって思います。でも、もうちょっとなんか、やれそうなことないかしらね。もうちょっと、やれそうなこと、ないだろうか。

学生男子：（無言）。

丹羽：実はね、この人が受けた被害っていうのは、雇用の場における被害、なんですよ。

この人は、働いている人、なわけです。たとえアルバイトであろうが。そうすると、雇い主のほうは、働いている人が、働いている場所でセクシュアルハラスメントなどの被害を受けないようにする、そういう配慮をする義務がある。これが今の法律の基準なんです。男女雇用機会均等法っていう法律に書いてあるの。男女雇用機会均等法に1997年に、セクシュアルハラスメントについて書き加えられた。働く人が働く場所でセクシュアルハラスメントといったような不快な労働環境で我慢しなきゃいけない状況を作ってはいけない、そのことについてちゃんと意識をして労働環境を整える責任があるんだよってということが書いてある。それは大学でも同じなわけですよ。大学においても、そのセクシュアルハラスメントの被害を受ける、それを我慢する、といったようなことをしないでいい。そのことは、被害を受けた側の責任ではなくて、学んでいたり働いていたりする、その場所の責任者の側がきちんと対応しなきゃいけない問題なんだよってということが書かれた、というのが今の状況なんです。こうなってくるまでが、実はとってもとっても大変だったんです。

具体的な大学のケースで言うならば、もう亡くなっちゃった方なので、悪く言いたいわけじゃないんですけれどもね、もしかしたら聞いたことがあるかもしれない京都大学の矢野事件っていうのがありました。聞いたことある人いますか？いない？ひどいセクシュアルハラスメントの加害者として有名になっちゃった人なんですけれどもね、この人はなんて言ったらいいんでしょうか、すごい力を持った研究者でした。東南アジアの研究では世界的に第一人者といわれるような人だったわけです。

その研究室で、助手さんとか秘書さんとかが、どんどん辞めていく。なんでだろう？ということで話を聞いたら、その秘書さんの採用面接で、その教授と会った女の人がぷんぷん腹を立てて話してくれた。とんでもない、秘書の仕事の大事な役割のひとつに、添い寝をするってのが入ってる、って先生から言われた、っていうんですよ。その人はとんでもないと非常に怒って、そのことを訴えていったんですけれども、周りの人はまさかそんなことが起きるはずがないと、ちょっと離れたところにいる人は信用しなかったんです。一番近くにいる人たちは、あ、またやった！っていうふうに思ったってことが、後になってわかってくるんですけれどもね。で、みんな何にも言わないで辞めていく、というのが立て続けに起きた。矢野さんという先生が次から次へ大学院生とか研究生とか秘書さんとか事務職の人だとか、そういう身近な女の人に対して、性的な誘いかけを繰り返し、そして、性暴力に及んだりしたということが明らかになってきたわけです。

でもそれが、数年間、まったく表に出てこなかった。なんでか？やっぱり、そんなことが起きるはずがないって、まず周りの人が思っていること、それから、もう一つは、やっぱりそのことはあんまりよろしくないけれども、でも大きな研究の方がより重要だから、たかがそれくらいのことでがたがた言わないでいいんじゃないか、っていうふう



に思う人もいたりした。というようなことの結果が、みんな揃って口を閉じるっていうことになっていたわけです。実はその研究室の中で、毎日、唱えられていた五訓というのがあったんですね。これ裁判の資料にもなっているんで公表されていることなんですけれども、最初に言われていることがね、「矢野先生は世界の宝、日本の宝です。心を込めてみんなでお尽くしいたしましょう」、という文章で始まっていたわけです。矢野先生が世界の宝、日本の宝っていうのは、これはある意味本当のこと。みんなで心を込めてお尽くしいたしましょうっていうのも確かに大事なことではあると思うんです。だけれども、そのことが、自分が性的な自由、私の性的な自由ということを、その先生の思い通りにしてくださって結構ですよ、っていうこととはまったく違うわけですね。ところが残念ながら、この私たちの社会というのは、心を込めてお尽くしいたしましょう、ということの中に、その相手方から性的なサービスを要求されたりしても、それもサービスのうちに入るのかもしれない、と思わせるような空気がずうっとあった、ということでもあるんです。

そのことが実は一番最初に、性差別のことをちょっと言っていたときにおっしゃった学生さんのお話とつながるんです。男の子はこういうものだ、女の子はこういうものだという形での、性によって役割を分ける、できること、やるべきこと、そういうことを分けていく、性別役割を当然とする意識が強くあると、性的サービスというようなことが、なんだか自然に受け入れられていってしまうような、もちろんそれは被害を受ける側ではないですよ。加害をする側にとって、非常に当然視されていってしまうような、そんな空気があるっていう現実なわけです。この矢野事件が表に出たときに、実は周りの男性の研究者たちが言ったことがそれだったんです。たかがセクハラごときで、矢野さんが大学を辞める必要はないんだ、という主張。だけれども、被害を受けた側の人にとってみたらどうでしょうか。矢野先生を安眠に導くために添い寝をしてさしあげたり、あるいはお望みだったら性的な行為の相手方もなってあげますよっていうようなことを、もしもその女性が強要されて受け入れたとしたら、その人の人生っていうのがまったく変わってってしまった、ということなんですね。

ハラスメント被害を受けて、自分の人生がすっかり変わったことの中身として、3つあると、ある当事者は言っていました。まず1つめは、自分自身は大丈夫だ、私はいやなことはいやって言えるし、やめてっていうことも言えるし、それから、このことはいやですと言って、さっさと帰るっていうこともできるし、自分の安全を守る行動を自分がとることができると思ってた。ところが実際にはそうではない。屈辱的な感覚を持ちながらも、それを受け入れざるを得ないという場面が実際にはあるってことです。さっきちょっと言ってくれましたよね、ペットショップでお客さんから性的なからかいをされた、そのときに、やめろ！とか、ひっぱたくとか、それから、出ていけ！もう帰りなさいっていうとか、そういうようなことがなかなかできない。とっさにそういう行動ができるというのは難しい。なんでか？相手はお客さんだし、気を使わなきゃいけないんじゃないか、ここであの人が腹立てて帰るようなことをしたら自分が店長から怒ら

れるんじゃないかとか、いろんなことを考えるわけですよ。相手が大学の教授だったら、この先生の機嫌をそこねたら自分が不利な立場になるんじゃないかとかいろんな思いがわいてくる。そういう中で、とっさに、私は私の自由というものをちゃんと持ち続けることができるんだという行動とか主張だとかが実はなかなかできない、ということがわかってしまった。つまり、自分で自分の安全が守れるかどうか自信がない、そんな気持ちがわく。

2つめには、周りの人たちのことが信用できなくなっちゃった。たとえば、やめてください、いっしょにやめさせてくださいって周りの人たちに言っても、周りの人はなるたけ知らん顔をするとか、無視するとか、それからまあ気をつけてね、がんばってね、ぐらいで離れていってしまう。きちんとそのことは誰が悪いのか、誰が問題なのか、っていうことを正確に言ってくれない。ましてその教員の同僚の人たちが、たかがセクハラごときであなたが大学を辞めることはないよっていうふうに教員の側をサポートする方に回っている。こんな事があると社会を信用できなくなっちゃう。

それから3つめには、自分の人生の将来設計が奪われた。ここでこういうことをやっていて何年後にはこうなるといような、自分なりの設計っていうものがあったのに、それをぶち壊されてしまった。進路変更をしなきゃいけないかったり、やりたい研究をあきらめたり、大学を替わっていったり、あるいはアルバイト先をやめたり、就職していた、せっかく入った企業を辞めなきゃいけなくなったり、というふうに、自分なりの設計が、その被害を受けることによってぶち壊されて行くんです。こういうようなことは、セクシュアルハラスメント由来の現実なんだっていうこと。こういうことって、なかなかわかりにくいわけですよ。たかがちょっと触られたぐらいじゃないか、そんなにいつまでもぐじゃぐじゃ思うことじゃないよ、みたいなことを周りの人が言えば言うほど、その本人は、自分が考えてることが間違ってるんじゃないかとか、周りの人たちはわかってくれないんじゃないかっていう気持ちになっていって、むしろ、自分の前向きの気持ちを閉ざされていく、そういうようなことが現実にはたくさん起きるっていうことなんですよ。

では二つ目の事例を見てください。すごくてきぱきしていておもしろくて明るいともんなから人気のゼミの先輩がいます。いつもその人はわざと卑猥な冗談を言うんです。昨日も暑いって言ったら、だったら裸になりゃいいじゃないって、音楽でも流そうかって。そばにいた2人の男の子もにやにやしている。パソコンの待ち受け画面にわざわざおかしい絵を持ってきて、これぎりぎりOKだよね、と言ったりする。普段でも、風俗の話をやたら聞こえよがしに言ったりして、私はそのことは知らん顔して平気な顔をしている、聞き流している。私はそんなことどうってことないよって顔してるんだけど、でも実はとってもいやな気分がしているんだ。でもそのことを、やめてくださいって言ったら、その人どうも根に持つタイプだから、そういうことを言うのも憚られる。なんかいい方法はないかしら。で、指導教員にちょっとこんなことでとってもやなんですけど、って言ったら、いやあ、A君は君のことが気に入ってるんだよお、なんて言われて

おしまい。というような気持ちを抱いている人がいたら、どうしようか？

どうですか？たとえばあなたのゼミの中でそういうことを言う人が出てきちゃったらどうする？

学生：別に、どうもしない。

丹羽：どうもしない？

学生：え、どっちが被害者か。

丹羽：あなたのクラスでね、誰かがそういう卑猥なことをわざと言う、わざと聞こえよがしに言う人がいて、そしたらそれ自体についてはどう思いますか。

学生：まあ、あの、ちょっと困るかな。

丹羽：ちょっと困ると思うけど、まあ。そしたら、その中にいた女の子が、すごくやなんだよねって言ってきたらどうする？

学生：でもたぶんなにもしないと思う。

丹羽：何もしないと思う…。と、そうすると状況は変わらないよね。で、その女の子休むようになっちゃったらどうする？

学生：なにもしない。

丹羽：しょうがないんじゃないのって思う？うーん。どうしてその人はそんなことを授業中にも平気で言っちゃったりするんだろう？

学生：えーと。

丹羽：そういうの言ってもかまわないって思うんだよね、きっと。で、そのことはあなたにとってはちょっと不愉快ではあるけれど、でもまあいいんじゃないかって思うの？。

学生：よくはないかもしれないけど、たぶん何もしない。

丹羽：なにもしないかもしれないけど、よくはない気がする。どうしてよくないと思う？

学生：うー。不愉快な思いをする人が出るから。

丹羽：不愉快な思いをして？

学生：言ってもわかんねーだろうとか。たぶん言っても根に持って嫌がらせするとかそういうのはあると思う。

丹羽：そういうことを言うのはたぶんその人は、そういうことがまず好きで言いたいんだろうということと、でもそれに対してその人に何か言うと根に持ってなんか言われそうだし、やっかいになる、やっかいなことが起きてくるかもしれないから、だからほっとく、自分が今度標的にされるってのはやだから、てことね。うん。そのキモチはどうですか？

もしそういうのがあなたのところの近くにいて、あなたに対してわざといろいろ言ってきたらどうしますか？

わかんない、そっかあ。最初の方の、西船橋の事件っていうんだけど、地下鉄で死んだ男の話をしたんだけど、そんなのに近い経験してたことない？

学生：ない。

丹羽：もしその人だったとしたら、どうする？

学生：困る。

丹羽：なるほど。今、言ってくださったのは、駅の近くに行けば交番があるから、そこへ行ったらなんとかしてくれるじゃないか。警察がなんかしてくれる場合もあるし、何にもしてくれないってこともあるわけですよ。やっぱりセクシュアルハラスメント、性暴力って、一番根本的に大事なことは、私はどうするかな？ってということだと思うんですね。私にとってそれはどういう意味があったのかな、ということ。とりあえず自分が標的にされてるわけじゃないから、まあおいとこうかという感じでいると、状況はやっぱりエスカレートしていくんですね。さっきの教授の話も、世界の宝ってみんなが言ってくれるのを快いと感じる人が毎日毎日それを言われ続けていると、ますますそれで元氣になってく。でも、それって逸脱だよ、行きすぎだよダメなんだよ、っていう声を周りの人があげるっていうことをしていかないと、状況はよくはなっていないんじゃないかな。

私たちの周囲にはこういうことってすごくたくさん転がっているというか、ごくごく普通のこととしてあると私は思います。私は、20年近くずっとそういう相談を受けてきて、被害を受けるっていうことが、決して特別なことではなくって、ごくあたりまえの日常の中に一杯その芽は潜んでいるっていうこと。それをみんなが、まあたいしたことないからいいやとか、自分に向かってるわけじゃないからいいよっていう気持ちで、みんながいるとすると、やっぱり状況はより悪くなっていってしまうし、苦しんでいる人がどんどんどんどん追い詰められていく、という結果になってくるっていう例をたくさん見て来ました。そのときに周りの人が、誰の問題か、それは誰が悪いのか、ということちゃんと判断できるってことが、すごく重要だと思います。だから、何も自分が行動はしないとしても、あなたが不愉快な思いをしていてやだって思ってる、っていうことはわかってるよ、せめてそれくらいのことは言ってあげてくれると、うれしいなと思う。自分が標的になるのはいやだから、それ以上表立ったことを言ったりやったりはしにくいんだけど、でもこういう状況ってやだよ、っていうことがちゃんと伝えられる、そんなことをまず始めてもらいたいと思います。

次に3番目のケースを見てください。これはデートレイプのケースです。これも実際にあったこと。実際にあったことを複数のケースを合わせて一つの文章にしたものなんですけど、こんなことがよくあります。

Aさんは大学に入ったばかりの1年生。Bさんに勧誘されてスポーツクラブに入りました。その先輩はとってもかっこよくって憧れてる人が何人もいるみたい。秋に新人デビュー戦があって、そのあとの飲み会で隣の席に座って、それで会話が弾んで、二人でちょっと抜けようかというので、会を抜け出してお茶を飲みに行ったらキスされちゃった。それってちょっと意外だったけれどもうれしい気持ちもした。で、次の週末にデートしましよってことになった。デートの日、そのAさん、すごくうきうきした気分だね、だって憧れの先輩とデートができるわけですから。少しカワイイ系のおしゃれな洋服を着ていった。いい日にしたいと思ってうきうき出かけていったけれども、映画に行く約束

だったんだけどすごく混んでいたの、入れたのは次の回だった。で、帰りが思いのほか遅くなってしまった。そしたら B さんが送ってきてくれた。全然方向違うのに家まで送ってきてくれてすごくうれしいなと思った、ちょっと悪かったかなと思って、きっと断るだろうと思いながら、コーヒーでも飲んで行きますかって聞いたら、B さんは、あ、それはありがたいなあって、これから 1 時間半もかかって帰らなきゃいけないから、ちょっとコーヒーご馳走になるよと言って部屋に上がってきてしまった。思わぬ展開で A さんの方はちょっとびっくりしながらも、コーヒーを入れていたら、そこで、後ろから抱きすくめられて押し倒されて、性行為を強引に進められてしまった。A さんは何が起きてるのかわからない、ほんとに頭が真っ白という感じにいるのに、B さんの方は、また電話するからね、と言って元気に帰って行った。実はこの A さん、翌日から全然大学へ行かなくなっちゃうんですね。で、B さんが何度も何度も携帯に電話するんだけど全く電話にも出ない。B さんにしてみても何が起きたかわからない。A さんの方は、何でこんなことになっちゃったのか、という思いで、ものすごくいろんなことが湧いて来て、身動きがとれなくなってしまった。こんな状況っていうのは、A さんにとっても B さんにとっても、予期せぬ展開であったのかもしれないんですけど、これってどうしたらいいんでしょうね？

たとえばあなたが A さんの同級生だったら、女の子の方の同級生だったらどうします？。

学生：…本人が判断するしかない。

丹羽：本人にも判断できなくなっちゃってるの。大学へ全然出てこなくなっちゃったの、どうしよう？

学生：わかりません。

丹羽：わかりません？本人の判断だからしょうがないよって？それ以上なんかできるかどうかかわかりません、そういう感じね。例えばね、このケースなんかでも、警察に A さんが届けたとしたら警察はどう扱うか、かなり難しいと思います。というのは、やっぱり彼女がその部屋の中に彼を入れたこととか、そういう時間に彼女が上がりますかって言った、ということ自体が、そういう関係になったとしても仕方がないんじゃないか、って警察が判断する可能性はすごくあると思います。どう思う？

学生：なんとも思っていないんだったら、最初から部屋に上げるってことはしないで、もし相手が好きな人だったら、もうこうなってしまうからしょうがないから、とにかく二人で話し合って納得できる結果がでるまで、ちゃんと話をするってふうにしないと、なんかお互いに、何があったんだろうなで終わっちゃうと思います。

丹羽：そうだね、A さんの方は相手を好きでも何でもないんだったら部屋においでなんか言わなきゃよかったし、この人、B さんのことちょっと好きだったのよね。そしたらもう二人で十分話し合うしかないか。あなたが A さんなり B さんなりの友達だとしたら、二人で話し合うように、という場を設定するとかそういうお手伝いならできる？

学生：話し合うのが二人だけでは無理だったら、友達を何人か呼んで、それで、どう思っ  
てんのとかそういうのを問い詰めるみたいな。そういうふうにやってもいいと思います。

ひとりだとか怖いとかあるかもしれないから、女の子の気持ちを考えて。

丹羽：話し合いの場を作って、その場所へ一緒に居てあげる？彼女の、怖いというキモチだとか、困っているというキモチだとか、そういうのを少しでも和らげるようなことだったらできるかもしれないな、って思う？そうだよね。そんな形でお互いの、いま困ってることだとか、悩んでることだとか、ちょっと違うよなって思ってることだとか、そういうのを支えあえるような、そんな仲間だといいいんだけど、一緒に深く考えるとかいうことをしたりする？

学生：信用できる友達はある。

丹羽：信用できる友達はいっぱいいる。カッコいい、そっか。自分のみっともないことでもちゃんと言える？

学生：何でも言えます！

丹羽：うーん、でも、3秒しないうちに返事が返ってくるってのは、心配！私は。

学生：ほんとに言いますよ。

丹羽：うん、そっか。何でもいえますよっていうくらいのことしか言えないってのも、ちょっとさびしいよ！言えるかどうかわかんないなって、引っかかったりしないか。で、そのときにね、たとえばあなたの友達がBさんだとする、そしたらAさんの方が、やっぱりB君とちゃんと話がしたいってね、それで自分ひとりだったら怖いから女の子が何人か一緒にその話し合いに加わるって言うてるの。あなた、B君になんて言ってあげる？アドバイス。

学生：アドバイスっすか？もう、自分は一緒に行けないからねえ。がんばれよとしかいいようがないじゃないですか。

丹羽：どうがんばるの？

学生：とりあえずB君はたしかに悪いんですもん。

丹羽：どこが悪い？

学生：どこが悪い？そりゃこれ読んだらわかるよねっ。

丹羽：どこが悪い？

学生：どこが悪い？そうですね、やっぱり、まだ、そーいう関係じゃないじゃないっすか。

丹羽：まだ、そういう関係まで行ってないじゃない、ってことはどうしてわかるの？

あなたはそういう関係まで来たかどうかってどうやって判断するの？

学生：え？

丹羽：どういう関係まで今きたかどうかって。

学生：あ、それは性的な関係っすね。あるじゃないっすかやっぱ、常識的な線。

丹羽：だからその、常識的な線っていうのはどうやって判断するかっていうのをちょっと教えて。

学生：わかんないですもん。

丹羽：わからないの？でもこのB君はたぶん、今がそういうときだって思ったんじゃない？

学生：いいんじゃないんですか。もうわかんない。おれじゃねーもん（笑）。

丹羽：おれじゃねーからわかんねー？

学生：そんなんかんけーねー！

丹羽：かんけーねー！。

学生：かんけーねー！。(笑)。そんなんかんけーねーよ。

丹羽：あの、だからね、今考えてもらいたいのは、Aさんのほうはそのことについて話し合いたい、女の子5人くらいつれて話し合いをやろうって言ってきてるみたい。どうする？

学生：B君が行きますよ。

丹羽：で、どこが問題だったと思う？さっき言ったじゃない、ちょっとまだそういう関係じゃないじゃないかって言ったよね。なんなんだろう？

学生：どちらとも悪いですよ。

丹羽：どちらとも悪くなっちゃうの、今度は？

学生：実際だって、やっぱB君のほうが悪いですけど

丹羽：どうして悪いの？

学生：なんで悪いの？いや、それ。何で悪いのですか。女は、何で悪いんですか？言ったじゃないすか。

丹羽：言っていない。

学生：なんで悪いのですか？B君がなんで悪いのですか？そりゃだって、Aさんだってなんか、ほんとはやだったじゃないすか、こういうふうになっちゃったのは。その、たとえばなんていうのかな、性交渉をするにあたって、B君はなんか、こういう形になっちゃったけど、ほんとはやっぱ、話し合ったりとか、なんてんですか。まあ同意が、ない！

丹羽：あー！すごくいい答えをくれた。Aさん、OKって言わなかったんだよね。

学生：そう。Bくんが、アグレッシブで、Aさんも確かにい。

丹羽：Bさんの気持ちはわかる？そのアグレッシブになっちゃったっていう。

学生：(笑)。その質問！俺はしない、みたいな。いや、そうなりたいキモチも分かりますけれども、そりゃやっぱ自分は19歳ですしねー。そーいうことはならんでしょ。

丹羽：保証できる？(笑)

学生：そりゃ、できますよ！

丹羽：そうですか、はい、ありがとうございます。

丹羽：すごく大事なことだったと思うのは、話し合っていないじゃないかっていうことなのね。それからAさんの同意がないじゃないかって。やっぱりこのことってほんとに大切なことだと思うの。その人、相手の人、周りの人を大事にするっていうことは、その人に自分とは違う意思がある、自分とは違う考えをしている、かもしれない、そのことは、聞いてみなきゃわからん、てことです。聞いて見なきゃわからんからさっきからしつこく聞いているんで、お互いにちゃんと人の言ってることとか考えてることを聞きあえるような、そこんどこから対話が始まる、話し合って一緒に考えることができるような、

そういうなかでこそ例えば性関係っていうのは作られていかなきゃいけないのに、相手がどう思ってるかってことではなくって、きつこうに違いないってことで行動に走っちゃう、てなことが続くと、これはまさに犯罪につながっていくわけです。

第3番目のケースっていうのは、これはさっき、警察に行ってもそのままじゃ相手にしてくれないかもしれないといいましたけれども、実は、こういうケースの場合、例えばこの人がそのあと、非常に精神的なダメージを受けたとか、そのことを友人に悩んで相談をしたとか、自分のことをこういうふうに思っているとか、相手に対してこうしてほしいとか、そういう気持ちを明確に持って警察なんかに相談に行くことができると、状況というのは随分変わる可能性があります。私こんなことになっちゃって困っちゃってる、どうしましょう、だけでは、警察は動きませんけれども。でも私たちの社会は確実に、ひとりひとりの意思とか自覚とか、そういうことを大切にする方向へ変わってきています。こういういろんな人間関係の中での問題が起きたときに、そのことについて十分、相互理解をすること、それから、そのことについて相手が不快だと思ってるんだったら、そのことをちゃんと認めること、それから自分がなぜこう思うのかをみんなと一緒に話し合うことでもって、なるほどそうかっていうふうに共感の輪を広げていくこと、そういったことは、セクシュアルハラスメントにせよ、パワーハラスメントにせよ、自分自身を主体として大事にしていく、そんなことが、生活をしていく上ではどうしても欠くことができないものなんじゃないかと思います。大学にはこういうことについて相談に乗ってくれるシステムが今はもう作られているわけですね。そういうところをうんと活用しながら、でもこのことって結構一人一人にも厳しい要求をしてくることでもあるんだと思うんですね。考えないで動くとか、相手の気持ちを、きつこうに違いないと一方的に決め付けて行動する、といったようなことが、ハラスメントの最も大きな原因になってくると思います。こういったことについて、一緒に考えていける、そんな土壤が、確実にこの大学の中で育っていけばいいなと思っています。私の話はここまでにしたいと思います。聞いていただいてありがとうございました。(拍手)。

井上：どうもありがとうございました。今3つのケースを話されましたけれど、どれもみなさん結構思い当たる、こういうことってあるんじゃないか、と思う人もいっぱいいたと思うんですね。被害の側にも加害の側にも、どちらにもなりそうな場合って結構あるんじゃないか、アルバイトの場合でも、先輩と後輩の関係でも、ちょっと思い当たることがあったんじゃないかと思うんです。やっぱりこういうときに、自分だったらどうするのかっていうのを考えてみる、また、そういうことに出会ったときに、せめて自分は、わかってますよっていう、ほんと大変よね、って言ってあげられるような、そういう姿勢が大事なのかなと思います。

質問ある人いませんか？質問はないですか？それじゃあそれぞれ、家に帰ってゆっくり考えてみて下さい。なにか疑問が出たり、こういう場合どうしようかなってことがあったら、お友達と話し合ったり、大学の相談員の人でも教員でも手近な人に話したらいい



と思います。最後に、相談員制度が和光大学にありますので、相談員の方にその話を  
していただいて終わりにしたいと思います。

相談員：それでは相談員のことを話します。大学の制度として皆さんが、安心して、絶対に秘密がばれない、こんなことを人に知られたくない、誰にも相談できない、でもやっぱりだれかに聞いて欲しい、っていうときに、相談員がいます。その相談員の、アドレスですね。ここに相談のアドレスが書いてありますので、そのときにはメールを出してもらえれば、相談員が対応します。それから、だれが相談員かってことも、掲示板に張り出しておきますので、どこの学部だからだれだれに相談しなきゃいけないってことはないです。一番相談しやすい人を選んで、相談してもらってもいいです。相談にくる人で一番多いのはですね、こんなこと相談していいのかしら、っていうのと、私もうとっても自己嫌悪なんですって人が、多いです。その敷居を一步乗り越えて、是非、ことが重大になる前に相談してくれるといいなと思います。このパンフレットは是非もって帰ってください。

井上：ありがとうございました。いつでも相談員のひとは相談に応じますので、何かあったら声をかけてください。それでは今日の講演をこれで終わりたいと思います。長い間、お疲れ様でした。(拍手)。丹羽先生ありがとうございました。

以上